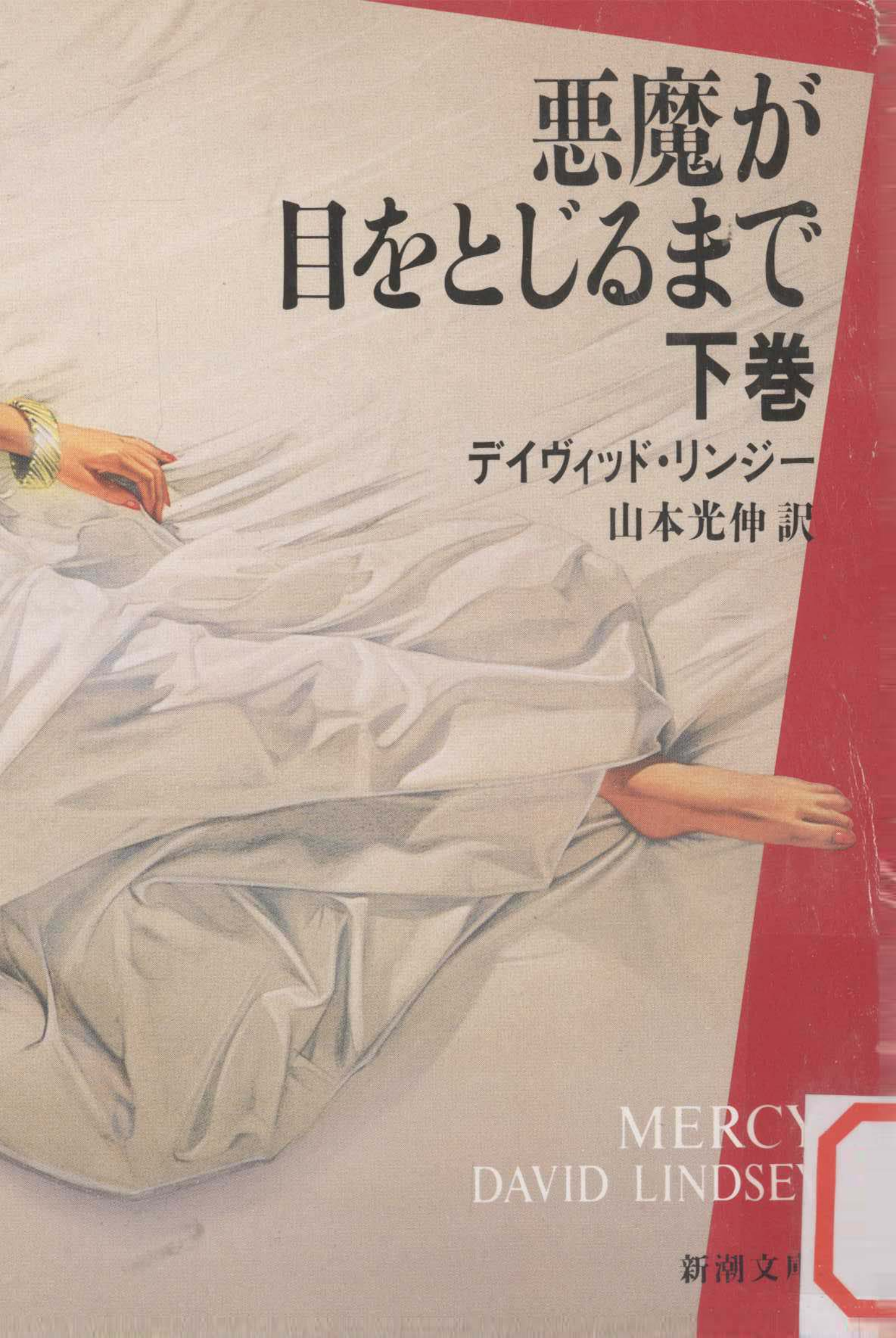


悪魔が 目をとじるまで 下巻

デイヴィッド・リンジー
山本光伸 訳

MERCY
DAVID LINDSEY

新潮文庫



Title : MERCY : vol. II
 Author : David Lindsey
 Copyright © 1990 by David Lindsey
 Japanese language paperback rights arranged
 with David Lindsey % The Aaron M. Priest Literary Agency,
 Inc., New York
 through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

あくまめ
 悪魔が目をとじるまで (下)

新潮文庫

リ - 7 - 3



Published 1991 in Japan
 by Shinchosha Company

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
 ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

郵便番号 一六二
 東京都新宿区矢来町七一
 電話 業務部(〇三)三二六六―五一
 編集部(〇三)三二六六―五四四〇
 振替 東京四一八〇八番

発行所

株式会社
 新潮社

発行者

佐藤 亮一

訳者

山本 光伸
やまもと みつのぶ

平成三年一月十五日 印刷
 平成三年一月二十五日 発行

印刷・株式会社光邦 製本・憲専堂製本株式会社

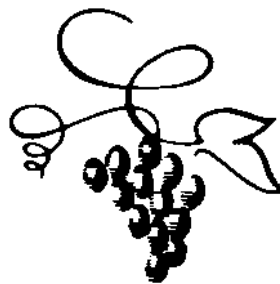
© Mitsunobu Yamamoto 1991 Printed in Japan

ISBN4-10-225203-7 C0197

新 潮 文 庫
江苏工业学院图书馆

悪魔が目をとじるまで
蔵 下 書 卷 章

山 本 光 伸 訳



新 潮 社 版

4604

悪魔が目をとじるまで 下巻

主要登場人物

カーマン・パーマ	}	ヒューストン警察殺人課刑事
ジョン・バーリー		
アート・クッシング		
ドン・リーランド		
フロレンシア		パーマの母親
サンダー・グラント		F B I 特別捜査官
サンドラ・モーザ		主婦。最初の犠牲者
アンドルー・モーザ		サンドラの夫
ドロシー・アン・セミノフ	}	...コンピュートロン社の従業員
ヴィッキー・キトリー		
ナンシー・シーガル		
ウェイン・キャンフィールド		
マージ・サイモン	}	広告代理店の従業員
リンダ・マンセラ		
ギル・レイノルズ	}	ドロシーの友人
ウォーカー・プリストル		
デニス・アクリー		ドロシーの別れた夫
ルイーズ・アクリー		デニスの妹
アリスン・ショア		医科大学産婦人科教授
ヘレナ・ソルニエ	}	ドロシーの隣人
ネイサン・アイゼンバーグ		
ドミニック・ブルザール		精神分析医
メアリー・ルウ	}	ブルザールの患者
バーナディーン・メロウ		

第二部（続）

六 日 目

37

六月三日

土曜日

フリッシュのオフィスからの電話で、パーマは朝の七時半に起こされた。九時に対策本部でミーティングがあるという。ベッドから出て、鏡を見ないで、まっすぐシャワーを浴びに行く。蛇口^{じやぐち}をひねり温度を少し低めにセットすると、後ろの壁に作りつけられたタイル製の低いベンチに長々と寝そべった。このベンチは、家を改造したときブライアンが考案したもので、パーマは気に入っていた。以前、早朝の半端^{はんぱ}な時間に帰って来てくたくたで立ってられないときなど、シャワー室の床に座り込んでいたものだが、こっちのほうがよっぽど快適だった。

ひんやりとしたタイルの上に横になり、髪を後ろに流し、顔に湯を浴びせる。パーマは疲れきっていた。ほぼ五時間寝たにもかかわらず、だ。いや、五時間ベッドにいたと言ったほうがいい。実際の睡眠は浅かった。寝返りを打って、グラントのこと、そして二人が一緒に

仕事をしてゆけるかどうかを考えた。寝返りを打って、リンダ・マンセラのこと、そして彼女のしたこととパーマ自身がどう感じたかを考えた。寝返りを打って、ヴィッキー・キトリの長く短い半生と、その人生が彼女のまわりの女性たちに与えたさまざまな影響へと思いを馳せた。そして時には、なかば意識の薄れた、一種の夢うつつの状態のなかで、これらの人々が混ざり合ったり、違った組み合わせになったりしたし、また時には、はつきり目を覚まして、彼らのことと自分のことを考えながら横になっていたのだ。

時間を思い出して、パーマはベンチから身をもたげ、髪を洗いだした。最後に冷水を浴びながら、目が腫れていないことを祈った。シャワー室から出て、水を滴らせている自分を鏡に映す。やっぱり。十歳も年取って見える。少なく見積もって十歳だ。まあ、しかたがあるまい。彼女にはどうにも手の施しようのないことだった。

パーマは急いで髪を乾かした。百回ブラッシングなどという、悠長なことはしていらなかった。それから、少しは見栄えのいいエジプト綿のシャツウェストを着て、医師協会名簿をわしづかみにすると、小走りに家を出た。

ヘモーズで朝食をとりながら、パーマはもう一度ドクター・アリスン・ショアの資料に目を通した。優れた研究活動によってベイラーでの地位を得た彼女は、その後も数々の学術的荣誉や国内の賞を受け、その一方で大学のカリキュラム決定学部委員会の議長に任ぜられていた。ドクター・ショアは人々が一目も二目もおく人物であり、パーマが驚嘆したのは、そういういったもろもろの活動をし、十代の息子が二人いるにもかかわらず、彼女がセミノフのグ

ループでの活動を楽しむ時間を見出していることだった。

一方のドクター・シヨアも妻に劣らずやり手であり、多くの国内医学団体の委員を務め、定期的に国際医学会議に出席するため各地を飛びまわって、彼の専門分野である眼科医学の論文を发表或したり、外国で開発された新しい方法論を学んだりしていた。彼の学究歴もやはり際立っている。これほど仕事に熱中している、今の言葉で言えば、自己を実現しているカッブルも珍しいだろう。

殺人課は通常の週末勤務に見られるような、だれた雰囲気^{ふんいき}がまったくなかった。対策本部の十名の刑事たちは二十四時間休みなく働いており、ときおり短時間の睡眠と、食べ物をかき込む時間がとれるだけだった。フリッシュは金曜の午後遅く、警部、管区長、重要捜査管^{かん}轄部長代理との会議に参加していた。その結果、彼は対策本部の運営責任を正式に託され、この事件が解決するまで、ほかの職務は免じられた。対策本部は全速力で走りだした。この二日間に加わった刑事たちも、それぞれの事件のおさらいを終え、手掛かりのあるところ、どこへでも出かけて行った。情報が次々に入って来て、ドン・リーランドが吟味し調整した情報につねに目を向けていることが、ますます重要になってきた。

フリッシュのオフィスでひらかれたミーティングで、対策本部の全員が初めて一堂に会した——クッシングと新しい相棒のリチャード・バウチャー、バーリーとパーマ、リーランドとナンシー・キャツスル、ヘルイーズ・アクリーとラーロ・モンタルヴォ事件^{けん}を引き継いだゴードイー・ホーズとルー・マーリー、ヘメロウ事件^{けん}を扱っているマニー・チャイルズ

とジョー・ガーロウ。フリツシュの希望で、それぞれの組が最新の進展状況を説明し、どの手掛かりが解決し、どれがまだ調査中または未解決かを述べ、各へ容疑者へのアリバイの有無、残された可能性の有無について明らかにすることになった。

彼らは一番古い手掛かりから始めた。

クツシングとバウチャーは、セミノフのアドレス帳に載っていた男たちの約半分を確認し終わっていた。

「美容師、マッサージ師、電気工、ダルメシアン犬のブリーダー、中古車のディーラー」クツシングが言った。「全員アリバイがあり、すべて確認が取れた。車のディーラーだけが、セミノフ以外の被害者と会ったことがある。デニス・アクリーに車を売っていて、集金に行ったときに何度かルイズと顔を合わせているんだ。一度、アクリー二人とほかに数名の男女を交えて、デニスの家で夜一緒に飲んだことがあるそうだ。ほかの者の名前は覚えていない」

クツシングは椅子にだらしなく座り、むつつりとした一本調子の声で報告を終えた。リーランドが出世したせいで、少なからず不機嫌になっっているのだろうとパーマは思った。入ってくる情報はすべてリーランドのずんぐりした手のあいだを通る。つまり事件全体の進捗状況に関する詳細を、リーランドとナンシー・キャッスル以上に知る者はいないということになる。二人とも生来口の堅いほうだから、クツシングが飲みに誘っても、うまくうわさ話を聞き出すことはできまい。第一、クツシングと飲みに行こう、などという考えを起こすよう

な二人ではなかった。

「ええと、わたしはちよつといい山を当てたんです」パーリーが、フリツシュに顎で促されて言った。ペーパータオルで口を拭う。フリツシュの向かいの机の端に、ジェリー・ドーナツの食べかけがナプキンの上に載っている。そのナプキンの端を発泡スチロール製のカップが押えていた。

「バーナデイン・メロウの信頼する精神科医であり愛人でもあるドミニック・ブルザール医師が、一九八五年の五カ月間、サンドラ・モーザの診療をしていたことがわかりました。彼女の夫によりますと、サンドラは友人にブルザールのことを教えてもらったそうです。モーザはその友人がだれだか思い出せませんでした。が、サンドラは確かに、一連の「心身の不調に基づく不安」を理由に、ブルザールの診療を受けに行ってます。アンドルーはそれ以上詳しいことは覚えていません。彼の知るかぎりでは、サンドラの診療は五カ月間で終わつたそうです」

「彼の知るかぎりでは、ね」パーマが口をはさんだ。

「セミノフのほうはどうだい？」フリツシュが訊いた。

「彼女の記録を残らず調べたんですが、ブルザールに関することはまったく見つかりませんでした」

「しかし、ブルザールにはまだ会ってないんだろ？」

「ええ」

フリッシュはメモを取った。「それじゃ、ゴードイー、ルイーズ・アクリーとモンタルヴオの件のほうはどうだった？」

「これはちよつと面白いと思いますよ」ホーズが言った。ホーズとマリーは長いこと一緒に組んでいる、殺人課歴十二年のベテランだ。彼らは右手と左手のような関係で、片方が何を考えているか、またどう考えているかがお互いにわかつていた。二人きりにほうつておいても、ちゃんと仕事をこなすタイプの男たちである。年はともに四十代後半。ホーズは長身・猫背^{ねこぜ}の男で、毎日ヘクレット^{ヘクレット}のチューインガムを二包み噛^かんでいた。ときどき包みの色を変えては、堅い被膜に覆^{おお}われた小さな四角形のガムのさまざまな味を楽しんでいる。数年前、彼は中年太りを気にすることをやめた。その結果、彼の体型は次第に変化を見せ、今にも子供が生まれそうな腹のずつと下にベルトはおさまり、ズボンが腰と尻^{しり}のところで見つともなくなつた。むことになった。

一方、マリーは一生太鼓腹とは縁がないようだった。痩^やせぎすの体型に変化はないものの、頭のほうは確実にはげつつある。頭頂からきれいに丸く抜けていくので、丁寧に剃^て髪^はした修道士のようだ。サッカー地の背広やスポーツコートがお気に入り、髪^{かみ}の毛の損失を補うためにかもみあげをのばしていたが、少なくとも二十年は時代遅れという代物^{しろもの}だった。要するに二人とも、ファッション・センスにおいては希望の持てない男たちである。

「聞き込み捜査をやつていて、この変なじいさんに会つたんですが、名前がジェリー・セイルズ、対麻痺^{たいまひ}患者で、アクリーの家の向かいから三軒目に住んでいます」ホーズは間をおき、

四角い白のチクレットを二つ、口のなかに放り込んだ。「ルイーズとラーロが殺された日の午後、通りのほぼ向かい側に「変な男」が車を停めるのを見たそうです。じいさんは寢室のテレビでジェラルド・リヴェラを見ていて——女が盲腸かどつかに、子供をはらむ話です——男の車の音を聞きつけて、聞きなれない音だったので、外を見たと言っています。ジェリーは近所の車の音を全部知ってるんですよ」ホーズはにやりとした。「ま、とにかくジェリーは男が車のドアをばたんと閉めるのを見た。七四年型ビュイックのぼんこつ車です。男は車から歩きだしたが、車を停めた家には入りませんでした。ジェリーが何事かと見ていると、男はルイーズの家の歩道で曲がった。で、がっかりして肩をすくめた。なぜなら「あの女」には、いろいろな客が来るからだそうです。それでまた、ジェラルドのフリーク・ショウを見続けたんです。ショウが終わる前の最後のコマーションのときに——ジェリーはジェラルドの番組にいくつコマーションがあるか知ってるんですよ——外をながめると、男が急ぎ足で車に戻ってくるのが見えた。その近所じゃ、朝早くにひじを揺らして運動しているばあさんたちしか、急ぎ足で歩かんそうです。男は車に乗り込み、ぼんこつビュイックのエンジンをかけると、煙を上げて走り去って行ったそうです」

ホーズは言葉を切り、まるでリハーサルでもしたかのように、マリーリーがあとを引き受けた。

「じいさんは人相を覚えてました」マリーリーはそう言うのと、てかてか光った頭を手でこすった。最近かぶりはじめた帽子のせいで、頭のとっぺんは白く、額は二色に分かれていた。

「われわれは署に戻り、聞き込みで出てきた名前を全部調べ、ファイルから写真を出して、昨夜またセイルズのところに行つてきました。じいさんはクライド・バービッシュを選び出しました。デニス・アクリーの古くからの仲間で、ダラスで娘を強姦した件でダラス警察の指名手配を受けている男です。セイルズはまったく躊躇せず奴を選びました。間違いないと言つてます。ほかに見かけた男はいないかと訊いたところ、ギル・レイノルズを指差しました」

「彼がそこで、ギル・レイノルズを最後に見たのはいつ？」パーマが話を遮つて訊いた。

「たぶん、数週間前じゃないかと言つている」とマーリー。「とにかく五、六回ほど見かけたことがあるそうだ」

「いつから？」パーマはマーリーのあいまいな答え方に苛立つていた。「去年から、二年前から？ それとも先月中に六回見たの？」

マーリーは彼女をじつと見た。「ちゃんと訊いたよ、カーマン」と静かに言う。その声の調子は、パーマにもう少し落ち着いたらどうだと言つていた。「おそらく五、六カ月くらい前だそうだ。だが、通りを行き来する人物全員の時間を記録しているわけじゃないから確かじゃないってさ。わしの知つたこつちやない、と言つてたよ」マーリーはにつこりとした。「そうか」フリッシュは顔をしかめた。「よし、全署にバービッシュの手配をしてくれ、ルー」ちよつと考えてから、「それから奴の昔の仲間当たるんだ。まだ街にいるほど奴はアホじゃないとは思うが、とにかく網は張つておこう」そしてホーズに、「小火器班はなんて

言ってた？」

「そりゃあすごいのを使ってたよ」ホーズがうなずく。「四五口径コルト・コンバット・コマンダー自動拳銃けんじゅうにシェラのヘパワージャケット、先端空洞弾くうどうだんです。サイレンサーを使つたんでしょう。たまたま持っていたんじゃないですね。やることが決まっていたんで、こんな重装備をしたんです」

フリッシュはうなずいたが、その首の振り方にだんだん怒りがこもってきた。「マニー、ジョー。メロウの件はどうなっている？」

マニー・チャイルズとジョー・ガーロウはヒューストン警察の殺人課では比較的新しく、どちらも来てから二年しか経たっていない。二人とも国の両端にある警察の殺人課——チャイルズはバッファロー、ガーロウはロサンゼルス——からやって来ていた。

「メロウの三人の前夫のうち、二人にインタビューだんなしました」ガーロウが口をひらいた。「二人ともヒューストンに住んでいます。もう一人は、最初の旦那だんななんですが、ハワイに住んでいます。二度目の旦那は、名前をウェアリングと言ひまして、彼女にはここ五年会つてません。殺されたことを伝えると、かなり動揺したんですが、少し落ち着いてから、彼女がそういう死に方をして驚くにはあたらなひと言ひました。彼女はかわいい狂女だったそうです」

ガーロウは煙草たばこに火をつけるとノートにさつと目を走らせ、コーヒーカップに手を伸ばした。それをすすっているあいだ、鼻からは二筋の煙が立ち昇っていた。人々がまだ肺がんの

心配などしなかった、一九四〇年代の煙草の吸い方である。

「彼女がバイセクシャルだったかどうかは知りませんでした。ストレートなセックスに対しては「中毒」だったそうです。好色で、そのためにいろいろなトラブルに巻き込まれたそうです。まるで盛りのついた猫で、いつも男を追いかけて回し、だれかに色目を使っていたと言ってます。彼は結婚後、彼女が浮気うわきをしていると知ってから自分も浮気を始めたそうです。やがて彼はもう一緒に暮していけないと思い、離婚しました。どうやら彼女、慰謝料をこっそりとふんだくったらしいです」

ガロウは人差し指で煙草をたたき、フリッシュのオフィスに持参した黒いプラスチック製の自分の灰皿はいぎらの中に灰を落とした。それから煙草を口に戻し、まとめてホチキスで留めた書類をめくりながら、舌でその煙草を左右にころがした。やがてそれをふたたび指に挟はさみ、話を続けた。

「次は三番目の旦那、テッド・レスコです。メロウは二番目の旦那と離婚して八カ月後に、彼と結婚しています。ああ、そう、ウェアリングはファスト・フードのフランチャイズ店を何軒も持っていて、裕福にやっています。レスコはNASAの近くに不動産会社を持ってまして、三年前にそこの土地開発で大金を儲もけました。二人の結婚生活は二年半。レスコはバーナデインの死でかなり取り乱していました。新聞で読んで知っていたんです。まだ彼女への思いが断ち切れなくて、それを率直に認めていました。『今でも彼女を愛してる』とこうです。離婚はバーナデインの言い出したことで、彼も気前よく慰謝料を出しています。」